

## 本調査のポイント

# 生徒の「自立」を念頭に置いた 保護者支援や キャリア教育を検討したい

本ページは、今回の調査全般から読み取れる現在の親子関係の課題と、高校の進路指導現場に生かせるヒントを、2人の現役の高校の先生の協力も得ながら考察していきます。10p〜31pのグラフや、32・33pの保護者座談会も併せて読んでいただき、先生方ご自身ももっている「保護者像」とも比較対照してください。そうして今後の保護者支援やキャリア教育に生かしていただけたら幸いです。

協力／神奈川県立藤沢清流高校 小島昭彦先生、東京・私立トキワ松学園中学校高校 木本寿先生、まとも／荒尾貴正（本誌編集デスク）

### ポイント①

進路にまつわる  
親子コミュニケーションは  
おおむね良好

本調査結果を概観して言えることのひとつは、高校生の進路に関する親子の会話は「おおむね良好」ということである。全般的にコミュニケーションは多く、雰囲気も悪くない印象だ。例えば、**図1**進路について話す頻度（10p）によれば、高校生は78%、保護者は89%が話している。女性に比べれば男

性のほうが少ないが、それでも高校生の男子でも73%、父親でも79%が話しているという回答。もっとも低い父親×男子（息子）でも78%に上っている。親子の意思の疎通もある。**図5**高校生の「希望進路」の共有度（13p）によれば、親子とも約9割が高校生の希望進路を共有しているところらえている。それには満たないが「悩みや不安」の共有も増加傾向であり、保護者の約7割は知っていると回答（**図6**、13p）。子どもの気持ちを受けとめることの重要性も広く認識されつつあるように見える。

### ポイント②

アドバイスを求める高校生と  
それにこたえる保護者

進路にかかわる親子コミュニケーションにおいて、具体的にはどんなことが話されているのか。

高校生から見える保護者の態度も、「相談に乗ってくれる」「あたたかく見守っている」などが上位に来ており（**図38**、左p）、高校生にとって好ましい印象のようだ。

**図2**進路について話す内容（11p）によれば、高校卒業後の「進路」や、将来の「職業」「夢」といったものが挙がった。進路のことを話す際に保護者がよく使う言葉も尋ねてみると（**図4**、12p）、「自分の好きなことをしなさい」「勉強しなさい」「自分でよく考えなさい」「自分で決めなさい」といった言葉が上位に。この結果について神奈川県立藤沢清流高校の小島昭彦先生は、次のような感想をもったという。  
「もし保護者の発言がこのような言葉ばかりだとしたら、親子の進路の会話はあまり深いものになっていないこと

も危惧されます。というのも、他のデータをみると、もっと具体的なアドバイス 子どもたちが求めているように見受けられるからです」

小島先生が指摘するのは、まずは図7(14p)。高校生の66%が保護者からのアドバイスを求めており、増加傾向である。図39にも同様の傾向が見える。保護者に「してほしい」ということについて、10項目並んでいるが、前回調査から値が増加している中に「具体的にアドバイスする」と「進路について私よりも詳しく情報収集する」がある。この2つはさらに、保護者の現在の行動・態度を尋ねている図38における順位と比べ、大きく上位に動いており、「してほしい」という高校生の願望が強いことがわかる。

保護者もこうした高校生の希望にこたえようとしているように映る。図8によれば、79%の保護者が「アドバイスしている」(14p)。けれども同時に、それが容易ではないことを示すデータもある。アドバイスに困難を感じる保護者は72%も存在する(図24、23p)。難しいながらも、子どもが満足するような助言を何とか行おうとしている保護者の姿が浮かび上がってくる。

図38 保護者の行動・態度として当てはまるもの (高校生/複数回答)

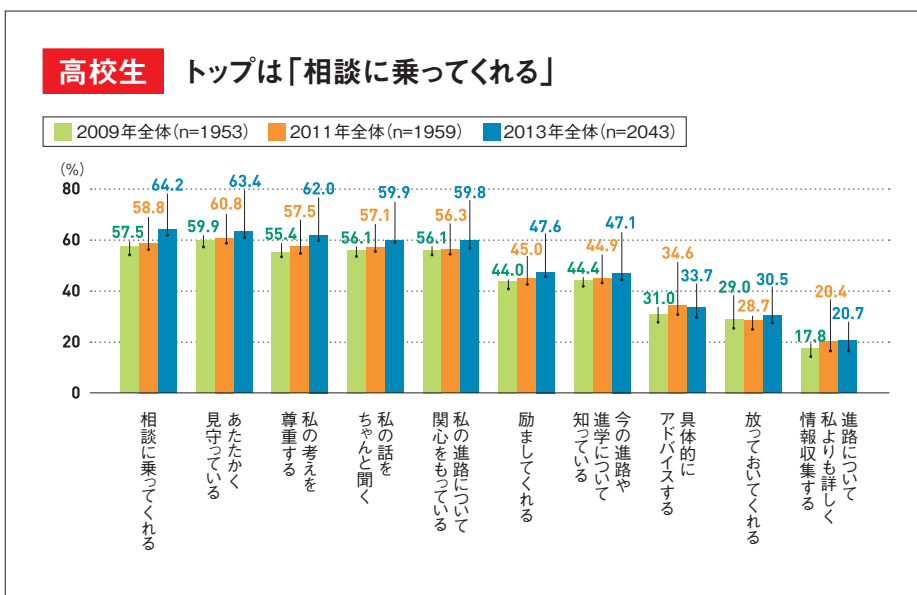
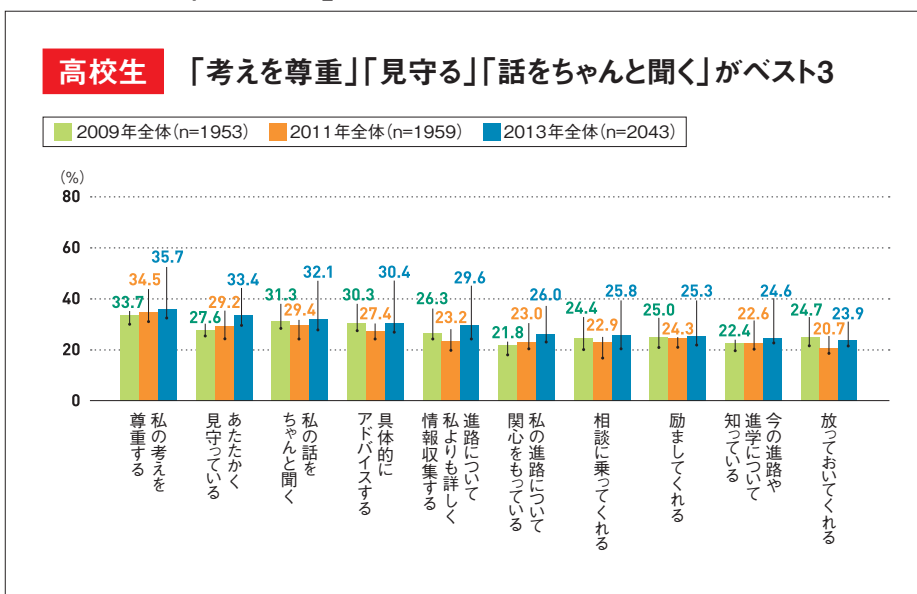


図39 保護者に「してほしい」と思うこと (高校生/複数回答)



ポイント ③

「出しゃばる」保護者が増加する兆候も

保護者に対して「具体的なアドバイ

ス」や「私よりも詳しく情報収集すること」を求める高校生が増えている印象があるなか、保護者は今後、どんな動きをしていきそうか。それは図30から類推できるのではないだろうか(28p)。

子どもの進路選択にかかわることとして、保護者が今後行いたいこと上位に位置づけられたのは、「興味をもった学校の入試方法を調べる」「学校の資料請求をする」「学校の見学に行く」など。「をアドバイスする」とい

った項目も並ぶ中、子どもへの「アドバイス」よりも、保護者が自ら「行動」することを選ぶ傾向が強いといえる。

このデータを保護者自身はどのように見るだろうか？ 全国高等学校PTA連合会に所属する保護者の座談会の中では、「親として出しゃばり過ぎではないか」という心配の声があがる一方、昨今の大学入試制度や学部学科名称の複雑化を鑑みれば、親がある程度調べたり、選択そのものにかかわることも致し方ないという意見も出ている(32・33 p)。

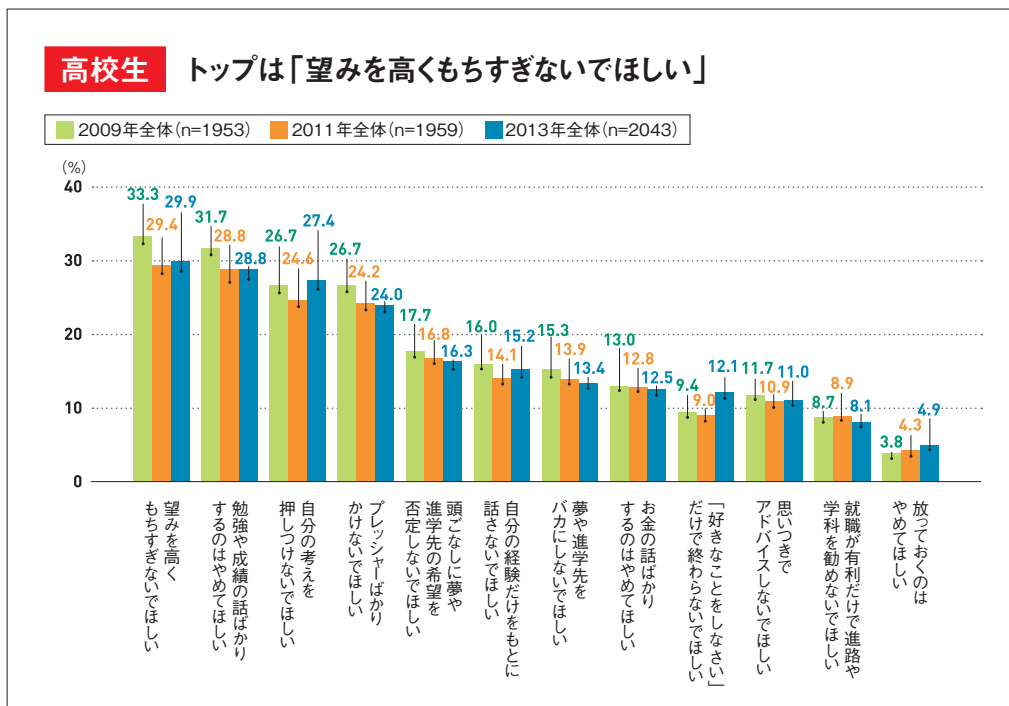
保護者が子どもの進路選択行動に自らかかわる理由については、別に尋ねている(図31、28 p)。結果は、「子どもと一緒に考えたいから」と「具体的な情報を知らない」と進路についての会話ができないから」が上位に。子どもと同じかそれ以上の情報を持ち、「一緒に考えたい」保護者が増えている印象である。

### ポイント④

社会の景況感と裏腹の親子の不安感

進路のことを考えるとき「楽しい」

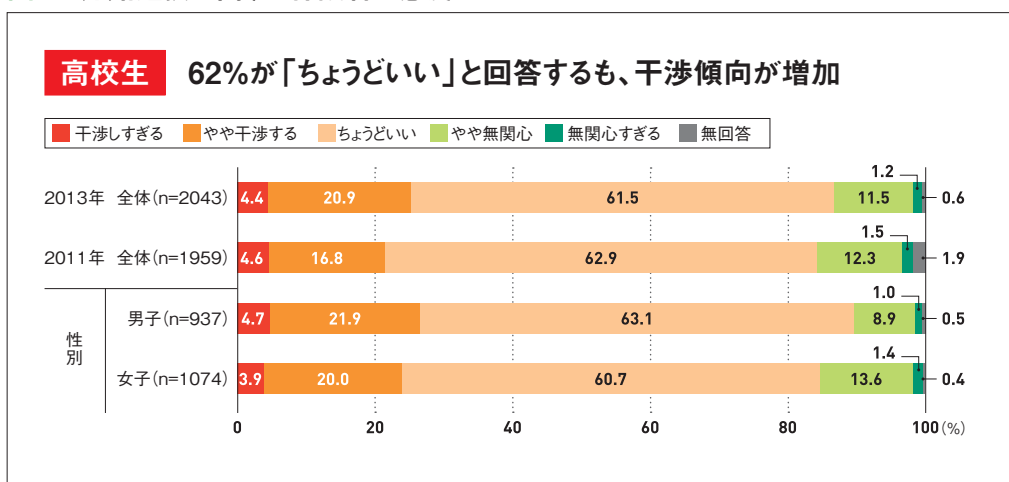
図40 進路を考えるうえで保護者にやめてほしいこと (高校生／複数回答)



と感じる高校生は1/4に止まり、7割が「不安」を感じている(図19、20 p)。「学力が足りない」が不安要因のトップだが、以下は「自分に合っているもの

がわからない」「やりたいことがみつからない」といった、適性や目標に関する不安が上位にくる(図20、20 p)。将来働くことを考える際にも、気が

図41 進路選択に関する保護者の態度 (高校生／単一回答)



かりは多い(図21、21 p)。高校生の7割以上が「気がかり」をもっており、保護者の約7割も子どもが働くことにすでに「気がかり」を感じている。気が

かりの内容のトップは、子も親も「就きたい職業に就くことができるだろうか」(図22、21p)。

こうした「気がかり」は、希望職業にも反映されている。高校生が将来就きたい職業のトップは公務員、以下は教師、看護師(図14、18p)。保護者が子どもに就いてほしい職業も公務員、看護師、教師という順(図18、19p)。「安定している」と見られている職業が、本調査においては毎回上位に来ている。

以上のデータは親子の心の中の「不安感」を表しているが、その半面、親子の未来社会への展望は、前回・前々回調査よりも大きく好転した(図23、22p)。これからの社会が「好ましい」と答えた高校生は前回27%から42%へ、保護者は17%から26%へと増加。この項目は全調査結果中、最大の変化を見せている。しかしながら、この数値を額面どおりに受け取ることは躊躇もする。理由は、この設問のフリーコメントの中にある(22p)。

これからの社会が「好ましい」と答えた高校生のコメントの中には、「アベノミクス」「東京オリンピック開催」という言葉が数多く見られた。こうしたトピッ

クにより「社会全体」が活気ある方向に向かいつつあるというイメージをもつ高校生は増えたが、先に見たように、それが「パーソナル」な不安感を払拭するには至っていない。一方の保護者のコメントには、あまり楽観的なものはなかった。「アベノミクスと言われるが恩恵はない」といったものや、国の就職難、財政難、少子高齢化など、若者の負担は今後ますます増加すると指摘するコメントが目立った。

これらに目を通すだけでも、高校生以上に保護者のほうが不安感や危機感を強く抱いていることがわかる。そして、このことが保護者自身の進路選択行動を後押ししている最大の要因ではないだろうか。

### ポイント⑤

#### 子の「自立」を妨げない 家庭教育を模索したい

進路選択において保護者が「出しゃばる」ような傾向が強まり、「親子一体化」が進むように見える中、いくつかの心配な兆候がすでにデータに表れている。高校生が保護者にやめてほしいこ

### 高校教師の見解1

● 神奈川県立藤沢清流高校 進路支援グループ 総括教諭 小島昭彦先生

#### 保護者は「先回り」しなくても良いのでは？ 子どもに「質問」することで成長を促しましょう

今回の調査結果からは、結構積極的



に子どもの進路選択にかかわる新しい保護者像が見えてきました。無関心や放任とは違う姿勢は、子どもにとって望ましいと思いますし、保護者自身が進路情報を持ち、調べ方も知っているのは良いことだと思います。ただし、保護者から一方的に情報提供するのをお勧めしません。子どもの成長を考えると、ならば、保護者は「質問する人」になっただけが良いと思います。例えば、  
あなたはどんな方向に進みたいの？  
それにはどんな勉強が必要なの？  
どんな学部に行ったらいいの？  
それはどこで調べればいいのか？  
調べたら、また教えてね  
というような言葉を投げかけて、会話のキャッチボールを行うのです。一般に「コーチング」と呼ばれる手法ですが、こんなやりとりをすれば子どもにも自ら調べる習慣が生まれ、答えをみつけ出す力が育まれたりすることが期待できます。ゆえに私は、保護者は子ども以上に進路情報を知らなくてもいいし、先回りしないほうが良いと考えます。  
保護者が子どもの「やりたいこと」を

尊重する傾向も調査全体から感じられ、すばらしいと思いました。子どもの「やりたいこと」は現段階で見え得る範囲のことなので、視野を広げるアドバイスを大人はもつとすべきとも思いました。その点で、仕事についての会話の減少は気になります(図11、16p)。子どもが将来就きたい職業は定番化している印象ですが(図14、18p)、現実世界には多種多様な職業が存在します。保護者の職業を話題にすることで、子どもは大きな学びを得られるでしょう。  
高校が今後すべきことについても多くの気づきを得ました。「もっと進路に関する情報提供を」という声の多さは(図26、24p)、本校の保護者の声とも重なります。進路情報を精選しつつ、高校としての考え方や取り組み、キャリア教育についても、具体的にお知らせしていく必要を感じました。(談)

との上位は、「望みを高くもちすぎないでほしい」「勉強や成績の話ばかりするのはやめてほしい」「自分の考えを押しつけないでほしい」など(図40、36p)。

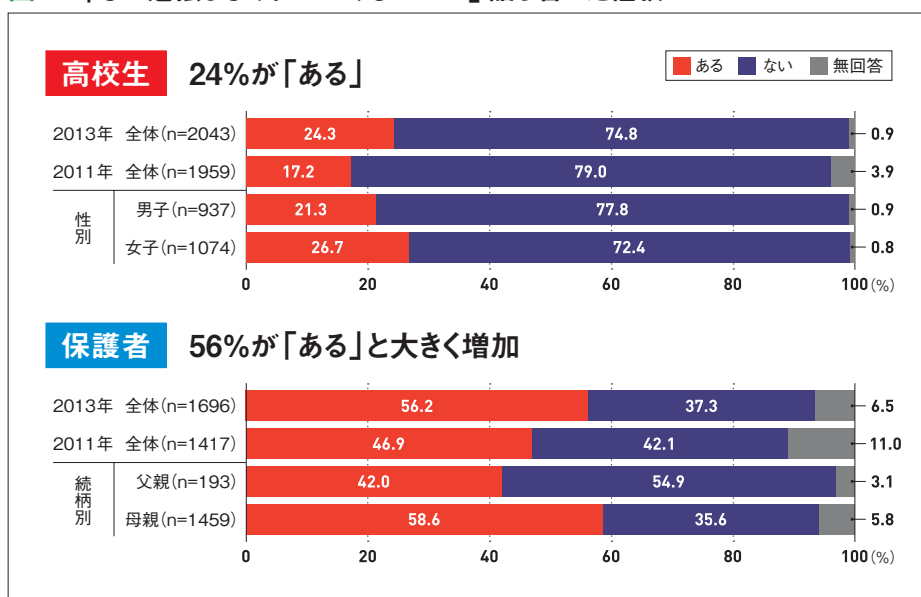
親子の距離の近さが「あだ」となる危険性を予感させる。また、保護者の態度を「ちょうどいい」とみている高校生は6割以上いるが、一方で「干渉」を感じる人も25%以上いて増加傾向である(図41、36p)。

こうした傾向が強まることは、高校生にとつて、あまり望ましいとはいえないのではないかと前出の小島先生は指摘する。

「進路選択にまつわる会話の中で、親子が目線をそろえて、具体的なアドバイスも交えた前向きなやり取りが行われるならば、それはすばらしいと思います。けれどもそのとき、保護者が高校生よりも多くの情報をもたなければならぬと思う必要はないと私は考えます。保護者から情報を与えるのではなく、できれば高校生が情報を調べていくように保護者から働きかけていたいただきたい。長い目で見れば、本人が調べていくほうがはるかに得るものは大きいです(37pコラム参照)」

いずれ社会で自立した大人として生

図42 「なぜ勉強しなければいけないのか」話し合った経験 (高校生・保護者/単一回答)

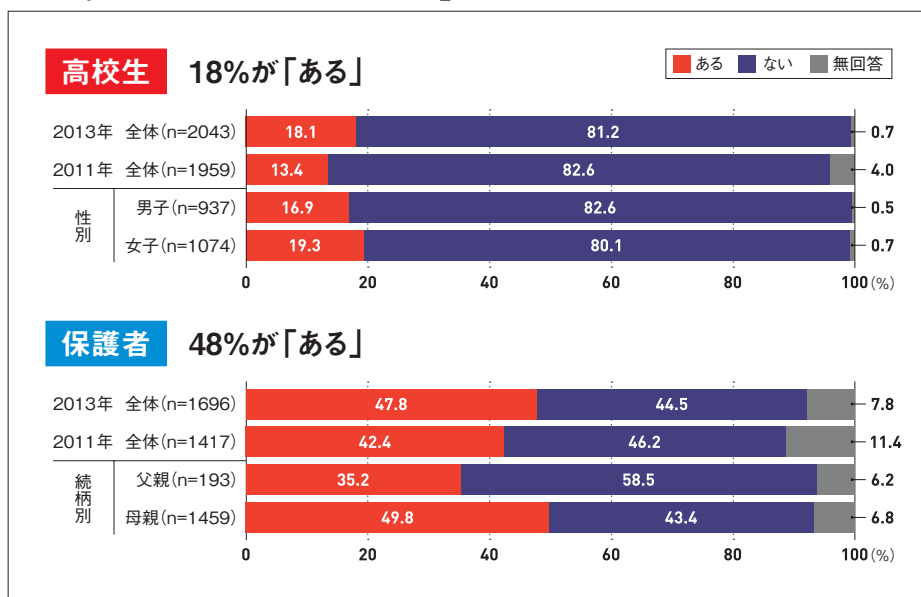


きていくためには、進学の際に子どもたちが主体的に動けるかが重要なポイントになるという指摘だ。

就職活動の際には、社会人基礎力をはじめとするあらゆる能力指標が「主体性」や「問題解決能力」の重要性を

「なぜ勉強しなければいけないのか」をテーマとする親子の会話は、子どもが自立した考えをもって行動できるようになるきっかけとなり得る。けれどもこのテーマについての会話の経験は、保護者が行ったという認識よりも、子どもそれは格段に低かった(図42、図43)。例

図43 「なぜ働かなくてはいけないのか」話し合った経験 (高校生・保護者/単一回答)



「なぜ働かなくてはいけないのか」をテーマとする親子の会話は、子どもが自立した考えをもって行動できるようになるきっかけとなり得る。けれどもこのテーマについての会話の経験は、保護者が行ったという認識よりも、子どもそれは格段に低かった(図42、図43)。例

高校教師の  
見解2

● 東京・私立トキワ松学園中学校高校 進路指導部部长 木本 寿先生

三者の信頼関係を築くためにも  
「保護者用進路ノート」をお勧めします

今回の調査でも見られたような、子どもの進路選択のために積極的に情報収集をする保護者は、確かに増加している印象があります。なかにはそれが過ぎてしまつて、「ぜひともこの大学」「この分野に」と、生徒の実態にそぐわないような希望をおっしゃる保護者も少数ですがいらっしゃいます。塾や予備校といった情報源もあり、そちらを重視したいという考え方も無理からぬことと思います。しかし本校では、まずは「学校を信頼してください」と申し上げています。それは、個々の生徒の進路希望は決してい加減なものではなく、その生徒と担任が二人三脚で築き上げたという自負があるからです。



本校では、生徒の自立を念頭に置いた進路指導を行っています。自分とは何か、どんな人生を送りたいか、世界とどう関わるべきかをじっくり考えさせ、進むべき道を絞っていき、問題意識を高めるために多くの読書体験や実習体験を推奨しています。それらを『私の進む道』という生徒用進路ノートに3年間記録し続け、それを介して担任とやりとりをし、担任は適宜相談に応じながら生徒の進路希望をしっかりと把握します。「そのうえで考え抜いた進路希望です」と担任が申し上げると多くの保護者は「先生がそこまでおっしゃるならば」と納得されます。

本校では、保護者用進路ノートも活用しています。『わが子の未来』という30Pほどの冊子で、高校入学時にお渡しします。内容は「入試の基礎知識」「高校三年間の進路スケジュール」「言っではいけないその一言、うれしかったサポート&言葉」など。6年前に導入し、ご好評いただいています。学校は進路について、いつ、何のために、何をやっているのかを理解していただく、信頼関係がより深まったように感じます。これにより保護者との「共通言語」もでき、複雑な入試制度を保護者会で説明する際や、毎月発行している「進路ニュース」の理解がスムーズになりました。

えば、こうしたデータが親子ともに一層高まるような教育や言葉かけが家庭で行われるようになることが、子どもの自立を目指すうえで必要であるように思われる。

ポイント⑥

保護者を支援する  
キャリア教育の必要性

今後、保護者が子どもの自立を促していくことを、高校としても支援していくにはどのような方法があるだろう。子どもの自立や親離れ・子離れについて保護者同士が語り合い、悩みを共有する機会を設けたり、小島先生が推奨するような「親子コミュニケーション」の勉強会を開催することも考えられる。その際に「保護者のための自己診断シート」(弊社サイトよりダウンロード可。下記参照※)などを活用して、「干渉」度合などをぜひ保護者自身がセルフチェックして認識していただくことが大切だと思う。「一人一人の社会的・職業的自立に向けた教育」がキャリア教育であり、ゆえに子どもの自立を支援するこうした活動も、まぎれもなく

キャリア教育といえるだろう。

キャリア教育の現状を見てみると、保護者の「キャリア教育」という言葉の認知度は42%で、決して高いとは言えない(図27、26p)。また、キャリア教育が推進されていくことについて、保護者の8割以上が「良いことだと思う」という認識をもっているが、「非常に良いことだと思う」という値が減少していることは少し気にかかる(図28、26p)。

これらのデータからは、各校のキャリア教育について保護者への周知が十分に行われていない可能性が見て取れる。真摯に取り組んでいる先生がいたとしても、何がどのように行われているのか、具体的な報告・共有が学校内外になされていないこともあるのではないだろうか。それではもったいないし、保護者の共感や協力を得られる機会をみすみす逃しているともいえる。

保護者会や面談などの機会に、保護者の現状をしっかりと受け止めつつ各校のキャリア教育のスタンスや具体的な取り組みを伝え、保護者との協力関係をしっかりと築いていきたい。真に生徒の未来に貢献する進路指導やキャリア教育は、その土台の上に実現していくのではないだろうか。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト: リクルート進学総研TOP > キャリアガイダンスTOP > ワークシート > 【保護者向け】自己診断